黄昏の天使たち

重田 寿

著者　重田　寿（シゲタ　ヒサシ）
神奈川県藤沢市辻堂神台2-10-20
TEL　0466-33-2063

黄昏の天使たち

1996年9月30日　初版発行

著　者　重田　寿
編集者　村上　信子
発行者　村上　秀雄
発行所　武田出版
藤沢市湘南台5－4－6　湘南台中央ビル2F
TEL　0466(43)1351（栄光学院出版局）
FAX　0466(44)2561（栄光学院出版局）
振替口座　00120－7－71931
発売元　株式会社 星雲社
東京都文京区小石川5－19－25
TEL　03（3947）1021
印刷／幸和印刷　製本／愛千製本

© HISASHI SHIGETA.　1996. Printed in Japan.
ISBN4-7952-0361-X　C0093　定価は表紙に表示してあります。

黄昏の天使たち

重田 寿

武田出版

目
次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黄昏の天使たち――7
縁の花――51
めぐりあい――73
しのびあい――93
オフィス・ラブ――111

恋の手ほどき――131
人妻烏――151
行きずりの女――165
摩津子からの電話――187
競輪必勝法――201

黄昏の天使たち

一　天使たちのお喋り

今日もプラットホームで豊子と和子が汗を流している。やれゴミはここ、缶はあっちと清掃に余念がない。

「とよちゃん、電車を待っていたさっきのお客さん……わたしたちのことを『天使』みたいって言ってたわよ」

「へーえ、冗談言わないでよ。皮肉皮肉、そんなこと言われて喜んでなんていられないわよ！」

豊子が反論した。

「とにかく、わたしたちは貧しき奉仕者なんだから。暑さにも負けず寒さにも負けず、貧しさにも負けず、そのくせ何を頂くというじゃないし、……日陰で暮らす根無し草よ。それが運命じゃないかしら。あんた明日に希望というものを持っているの」

「何も」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ほら、ご覧……やっぱり望み無き奉仕者なのよ。そして知らぬ間に年を取ってしまうのよ」

黄昏どきの陽光が、天使たちとプラットホームの大勢の客を鮮やかに写し出している。その艶やかなコントラストの一瞬は、まるで主役にスポットライトが当てられた舞台を思わせる。

真上にあった太陽はいつの間にか傾いて、プラットホームだけではなく地上の形あるすべてに影という長くて黒い羽をつけている。初めは短かった黒い羽はだんだん長さを増していく。気のせいか、その速さまでもが増してくる。旅人の影はまるでエントツ。時間帯によっては殺人的な賑わいを見せるこのプラットホームも、比較的黄昏どきのこの時間帯は閑散としている。静かだけに、舞台の黒く長い羽はなおさら神秘的で美しい。

東京駅はわが国の陸の玄関口。国内におけるさまざまの旅路のスタート地点となっている。新幹線、在来線を合計すると二十数本もの番線があり、乗り降りする客の多さでは日本でも指折である。多種多様のドラマが絶えず展開されて、おそらくは

流す別れの涙の量も日本一である。

列車が去ってひとつの整備作業が終わった。ホームの隅のほうではゴミの回収籠を腰掛け代わりに男女の『天使たち』が座っている。次の列車がホームに着いて、再び作業が始まるまでに幾らかの時間がある。それまで、居眠りをしている人、何かの考えに耽っている人、乗り降り客の動静をじっと見つめている人……思い思いに時間を費やし次の作業時間を待っている。作業員のほとんどが、もう色めいた噂にはとんとご無沙汰といった五十代以上の男女である。四十代以下の人もいるにはいるがあまり多くはない。官庁とか会社などを定年退職して、もうひと踏んばり働いてみようという人が多い。中・高の学業を終えて、この世界に飛び込んで来るという人もいるし、大学在学中にここでアルバイトをしていて、卒業してからも居着いてしまったという人もいるにはいる。

田中豊子は四十五歳、この駅に勤務して数年になる。

閑散の黄昏どきのプラットホームに、年の頃は七十歳くらいであろうか、一人旅

と思われる女性客が佇んでいるのを見つけた。ボストンバックや風呂敷包みを携えてはいるが、どういう旅なのかはわからない。豊子はふと気になって近づいた。

「どちらまで旅行なさるんですか」

と、話しかけた。

「ああ、毎日ご苦労さまですね」

「いいえ」

「末の娘が初産で、そのお手伝いに行こうと思っているんですの」

「それは、それは、大変ですね」

「あまり急ぐこともないので、各駅停車で行くことにしたんです。ここからは、新幹線や特急・急行などがいろいろ出ますが、ゆっくりあたりの景色でも眺めながら……どうせ、わたしたちの人生と同じように、今更焦ってみたってしようがないし、外の景色でも眺めながら旅というものを、よく味わいたいと思っているんですの」

百人いれば百の人生がある。そして百の旅がある。プラットホームと天使たちは長い間百人百様の旅姿を静かに眺めてきた。

新婚旅行……。現在では海外での新婚旅行が増えたが、まだまだ国内旅行も捨てたものではなく、ここ東京駅からワイワイガヤガヤの見送りとなる。いかにも披露宴の延長らしく、みな正装をぴしゃりと決めてバンザーイと歓声をあげている。見送りの中には当然のことながら既婚者もいれば未婚者もいる。そして決まり文句が、「元気で頑張ってこいよ」である。当の本人たちは、何をどのように頑張るのか、わかっているようなわからないような、とにかく見送りの人たちの期待に添おうとにこやかに笑顔を振りまいている。何となく楽しい風景のひとつである。

ときには、映画の場面さながらに、親子や兄弟と悲しい別れも見られる。事情はわからないが、離れ離れになることを互いに悲しんでいることだけは事実で、ときどき聞こえてくる「……ちゃん」という言葉や、啜り泣く声が、かえって駅で働く人たちにあれやこれやの想像力を沸き立たせる。見てみない振りをするものの、自分にもひとつやふたつの別れの経験があるだけに身につまされる。

天使たちはお喋りが大好きだ。

突然、和子が同僚の豊子に、

「わたしは、お芋が食べたくなったわ」

と言った。お芋というのは、女性同士で会話するときの符牒であって、ずばり男性自身を意味する。

東京駅で働く女性たちの過去はさまざまだが、誰もがなぜか過去を黙して語らない。

「食べたい」と話しかけた和子は、四十五歳の今の年になるまで独身であった。お芋の味は知らない筈である。一方話しかけられた豊子は、結婚を何回も繰り返している。口にこそ出さぬが男を見る目があると自負している。

「お芋なら休憩室のわたしのロッカーに、蒸かしたのがあるから、後であげるわ」

豊子は、知っているくせに知らぬ振りして、食べ物の方へわざと話を逸らした。

★

「そうじゃないわよ。そのお芋じゃないわよ。あっちのほうのお芋なのよ」
「ああ、わかったわ。あっちの方のね……言っとくけどあんたは、男を知らないんだから、なまじ知ってしまうと大変よ。知らないほうがいいんだわよ」
「そうかしら」
「わたしが男を初めて知ったときは……」
と言いかけて豊子は、やっぱり止めたとでもいうように首を振って口を噤んだ。
和子は黙って聞いていた。
「男を知ることだけ、つまり、恋愛や結婚を何回も繰り返すことだけが、幸せではないわ。繰り返したわたしが言うんだから正真正銘よ」
「あんた、男を知らないわたしに対しての皮肉のつもりなの……」
和子は、むっとして言った。
「いいえ、そんなつもりで言ったんじゃないわよ」
豊子は常々、和子は今さら男を求めないほうがよい。知らなければ知らないで済むことなんだからと思っていた。自分の過去の数々の過ちや挫折を思うとき、男を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.